

# 患者の視点に立った標榜科名と治療

若葉ファミリー 常盤平駅前内科クリニック

院長 原田 智浩 氏



## 漢方への期待は想像以上

若葉ファミリー 常盤平駅前内科クリニックは、本年6月、千葉県松戸市の新京成線常盤平駅前に開院した。入り口横の常盤平さくら通りは日本の道100選に指定されており、桜の名所として知られる。

開院にあたり5年間かけて準備した院長の原田智浩氏は、元々大学病院や一般医療機関で西洋医学一辺倒の医療を実践していたが、“病名”を重視する西洋医学の限界に悩んでいた頃に、個人の“証( 体質・状態 )”を重視する漢方医学に出会い、以後日本漢方の殿堂、金匱会診療所( 東京八重洲 )で研鑽を積み現在に至っている。

開院時から漢方内科を標榜した原田氏は、「新規の施設であり、地域に定着するまでには時間を要すると予想していた。しかし実際には、想定医療圏外の遠方からも、漢方治療を受けるためにかなりの数の受診がある。漢方への住民の期待は、想像以上に大きかった」と現在の印象を語る。

受診患者には、のぼせや手足の冷え、慢性便秘などの訴えを有する女性やアレルギー疾患、整形外科的疼痛疾患を有する患者も多い。また、駅前という立地からか、心療内科的な問題を抱える患者も少なくない。「漢方治療を求めてくる患者のほとんどは、すでに他施設で治療を受けており、長期治療でもよい効果が得られていないケースも多い。漢方薬は

“証”が合えば奏効するので、治療に役立っている( 原田氏 )。

## 患者本意に基づく漢方標榜

漢方が正式に広告できるようになったことを、原田氏は「以前は、西洋医学的な病名がつけられない曖昧な症状には、とりあえず様子を見ましよう、としか言えなかった。しかし漢方を使うようになってからは、治療することを諦めずに済むようになった。これまでも、治療を本意として漢方を実践している医師は多く、患者を救うとの視点に立てば、漢方が標榜の選択肢として盛り込まれているのは喜ばしいこと」と評価している。

漢方の標榜方法については、臓器名や疾患名を加えて標榜科名を作るのはおかしい、とする向きもある。しかし原田氏は、新しい標榜方法に賛同している。「漢方医学は、一般内科以外にアレルギー科、皮膚科、女性科、心療内科、整形外科など複数の診療科を内含する性質があるため漢方診療科とした方が現実的かもしれない。ただしそれは医師側の視点であり、患者側の視点では漢方内科、漢方皮膚科など西洋医学の診療科名を付帯した方が分かりやすいのではないか」と原田氏。

## 東西医学の視点で最良の治療を

教育、臨床現場における漢方医学の認知度拡大に従い、漢方治療の効果のエビデンスを求める声も多い。

原田氏は、「西洋医学を中心として医療を実践している医師に漢方の有用性を伝え、納得させるには、無作為化比較試験(RCT)などの研究、研究室レベルで得られるエビデンスを示すことは有用である。しかし本来、漢方医学と西洋医学は質の異なるものであり、西洋医学の土俵で漢方医学を評価することには疑問を感じる。臨床の現場では漢方がなぜ効いたかより、漢方でいかに治療できたかが重要である。漢方が標榜可能になったことで、西洋医学中心の医療の現場に漢方医学が介入できる可能性が高まった。私は患者の症状に対し西洋医学的にアプローチする一方で、西洋医学では補完できない症状に対して漢方医学を併用し、提供する医療の質をより向上させたいと思っている」と臨床医としての姿勢を示した。

